

2026年3月12日

2025年度 経済・経営学会学生研究助成報告書 経営学部 相川奈美専門ゼミナール産学連携事業に関する報告書

はじめに

経営学部相川奈美ゼミナールでは、2025年度専門ゼミⅠ・Ⅱの活動の一環として、前期においては、株式会社ヤクルト東海様と後期においては、損害保険ジャパン株式会社様と産学連携事業を行った。以下に、25年度前期および25年度後期に実施した、産学連携事業の活動内容と得られた成果や反省点などを報告する。

株式会社ヤクルト東海との産学連携事業に関する報告書

ヤクルト東海との合同でにしんわいわいフェスティバルに出展したゼミ活動について振り返る。このイベントでは、子供たちにヤクルトについて楽しく理解してもらうことを目的とし、「善玉菌 vs 悪玉菌カードゲーム」という企画を行った。ゼミ生たちは、2年生を中心にグループに分かれ、3年生はサポート役として各グループに入るようになった。

1. 活動を通しての反省点学び

i. 準備段階について

準備段階においては、各グループでイベント案を出し、ヤクルト東海様へのプレゼンテーションを行い、1つの案へ絞った。以下は、イベント後に行われた振り返り報告会において学生から提案されたフィードバックを纏めたものである。

第一に、ヤクルト東海の方々への発表の際に企画内容の説明が不十分であった点が挙げられる。口頭の発表だけで理解してもらおうと考えていたため、結果としてイベント開催直前まで学生側とヤクルト東海の方々との企画理解に差が生じてしまっていたことが挙げられる。このことから考えている内容を相手理解してもらう難しさを痛感したため、早い段階からカードゲームの詳細をさらに詰め、本番に近いシミュレーションを行い、実際にカードゲームを体験してもらう必要があったという気付きを得ることができた。第二には、準備作業がイベント直前に集中していたことや会場の下見の遅れなどのスケジュール管理の甘さである。限られたゼミの時間内で何をすべきかを明確にしていなかったことがまず準備の進行の遅れにつながったと考える。グループリーダーの学生は中心的な役割を担っていたのにも関わらず、ゼミの時間内の進行をサポート役である三年生に委ねてしまっていたことも原因であり、その日の作業目標を明確にしてからゼミに臨む必要があったという反省が出された。またこのスケジュール管理の甘さから作業に遅れがでてしまい、リスク管理、シミュレーション不足にも繋がっていったと考える。第三は、仕事量に偏りが生じてしまったことだ。負担が大きい人と小さい人でかなりの差があったと感じた。グループリーダーの学生は、中心的な役割を任されていたため、仕事を割り振らなければならなかったのにも関わらず、うまく割り振ることが出来なかった。原因としての一つに、だれがどの作業をしているのかを把握しきれていなかったこと、何をしなければいけないのかを明確にしていなかったが挙げられる。また、自分でやったほうが早い、人に頼むと負担をかけてしまうのではないかという考えから、必要以上に自分で仕事を抱え込んでしまっていたことである。結果として仕事量に偏りが生じてしまい、特定の人に負担が集中

してしまったことは、作業効率の低下や公平性を損なうことになってしまったことが大きな反省点である。

企画が確定するまでの期間、「ヤクルトタウン」の実施に向けて、先輩方と協力しながら準備を進めた。元の企画内容を簡略化し、子どもたちに学びを得てほしいという目的を形にできたと考えている。しかし、プレゼンテーションのシミュレーションが不足しており、ヤクルト社への提案時には円滑な説明ができなかった。これは準備不足および関係者間のコミュニケーション不足に起因するものである。

企画が「カードゲーム」に一本化されて以降は、資料作成やカード制作を主に担当した。自身のミスが企画全体に影響を及ぼす中で、細かな誤りにより修正作業が何度も発生したことは反省点である。数名の先輩に確認を依頼していたが、確認者の人数を増やすなど、チェック体制の強化が必要であった。

また、準備が遅れた要因として、役割分担の不十分さや情報共有の不足が挙げられる。カードゲームは準備物が少ないことから油断が生じていた可能性もある。参加メンバーが限られていたことにより、作業負担が偏ってしまった点も課題であり、ゼミ内での積極的なコミュニケーションの必要性を実感した。

ii. 当日の運営について

当日は、予想より多くの来場者があり、待ち時間が発生してしまった。カードゲームのセットを一つ多く用意していたためゲームが行える箇所を一つ増やすことが出来たのは良い点であった。しかし待ち時間が発生したとき何をしたらよいかをしっかりと決めていなかったことが良くない点であり、待ち時間内にルール説明を行い回転効率を上げたり、呼び込み係を戻し人員を補填したりするなど改善点は多くあったため、リスク管理不足、シミュレーション不足を実感した。また、本番当日のゲームのルール説明についても課題があった。全員がルール説明できるように台本を作成し準備したが、実際に子供たちに説明をしても理解してもらえないことが多かった。前述のとおりヤクルト東海の方々への発表の際、口頭の説明ではあまり理解を得られなかったことから、ルール説明の段階で練習時間を設けた。しかし実際は本番のゲームが始まり、ゲームが進行する中で理解をしているように感じた。そのため当日、準備した台本を大幅に省略しゲームの進行を行った班も出てしまった。このことから、伝達には体験を重視する姿勢の大切さを学んだ。

3. おわりに

今回にしんわいわいフェスティバルの出展を通しての活動で、企画段階から当日までの一連の活動において準備不足や役割分担の重要性を痛感した。リスク管理やスケジュール管理の徹底、シミュレーションの実施、作業の均等な割り振りといった改善点を次年度に生かすことで、次回はより円滑な企画運営を実施することが可能になると考える。

また、企画の意図を相手に伝えことの難しさと工夫の必要性を理解することが出来た。この経験は今後のゼミ活動においても役立つと考える。

さらに、今回の活動を通じて、準備段階におけるスケジュール管理・役割分担・確認体制の重要性を痛感した。特に、関係者間の密なコミュニケーションが、企画の質と進行に大きな影響を与えることを実感した。今後は、企画段階から早期に完成形を意識した設計を行い、ミスを最小限に抑える体制づくりと、チーム全体での連携強化を図っていきたい。また、対象者の年齢やニーズを柔軟に捉え、状況に応じた対応力を高めることも課題である。

本イベントを通して得られた経験は、今後のゼミ活動や実践的なプロジェクトにおいても活かしていけると確信している。

以上のように、学生たちは、学生同士のコミュニケーション不足、さらに、来場者とのコミュニケーション不足が活動に支障をきたすことを、今回の産学連携を通じて学んだようである。

損害保険ジャパン株式会社との産学連携に関する報告書

本報告書は損害保険ジャパン株式会社(以下、損保ジャパン)との産学連携において 2025年 11月 8日(土)に名古屋市昭和区の川名公園で開催された、防災減災秋まつりに「防災減災五七五かるた」を出展するまでの過程および、その結果と成果について記述するものである。

1. 企画の立案と変遷

本連携において損保ジャパンとゼミナール間の調整役を担った。当初は損保ジャパンの既存ツールである「ナマズの学校」を改良したカードゲームを作成する予定であったが、権利関係の問題によって改良および類似したカードゲームを作成することが不可能であることが判明した。この不測の事態に対し、速やかに「完全オリジナル教材の開発」へと方針を転換し 1週間以内に4つの代替案を起案した。

最終的に選定された「防災減災五七五かるた」は視覚的に理解しやすいこと、取り札を取るために読み札の内容を聞いて想像するため記憶定着の良さを重視した。制作面では頭文字に「相川ゼミ」と「損保ジャパン」を織り交ぜることで、産学連携というオリジナリティを強調し合計で43文字のかるたを考案した。

また既存ツールの有効活用として、かるたの内容と連動した「応急手当ワークショップ」を提案した。しかし、このままでは損保ジャパンと相川ゼミがそれぞれで活動することになり産学連携としての意義が無くなると考え、学生が応急手当ワークショップの講習を事前に受け当日のファシリテーターを務められる体制を構築することで、単なる物品提供に留まらない双方向的な連携を実現した。

2. 組織運営と進捗管理

イベントの制作をする際に夏季休暇中という対面での活動が困難な状況下に陥った。このような困難な状況の中でゼミナール内を4グループに分けリーダーという役割を作り、階層的な情報伝達体制を構築した。進捗管理においては、後期開始時からイベント当日までのシミュレーション時間を確保するため、休暇中にかかるデータの作成を完了させることを目指し逆算型のスケジュールリングを徹底した。

情報の共有に関しては、情報の正確性を重視した。個人の主観による解釈が入り混じることを防ぐため、企業からの情報は要約せず共有しゼミナール生からの質疑も敬語の修正に留めるなど、情報の非対称性を解消するために客観的に伝達することに注力した。

3. 不確定要素への対応

現場情報の不足というリスクに対して、事前の想定と柔軟な現場判断の両立を図った。当日のブースの規模が不明瞭であったため損保ジャパンとの事前シミュレーションに基づいて当日の状況に応じた複数のレイアウトパターンを準備した。結果として、当日のブースの状態を最大限に活用した受付およびワークショップスペースの構築に成功した。

また、当日の運営効率を高めるため役割分担を細分化したシフト体制を導入した。複雑なノベルティ配布のルールについては「運営マニュアル」を作成し、事前に周知を徹底することで各々の判断による混乱の防止に努めた。

4. 実施結果と成果、反省点

イベント当日は親子連れを中心に合計約300名(100組)の方の来場を記録した。ひらがなが読めない幼児から小学生までの低年齢層には楽しみながらの学習を、保護者層には解説

を通して専門的な知識の提供を行うことができ高い啓発効果を収めたと考える。

ゼミナール内での成果としては、想定を上回る来場者に対し現場の判断でかるたとワークショップのブースを即座に増設し、待機列の解消に努めることができた。また各自がシフトの枠を超え、非番の時間帯もブース付近で待機していたことで混雑時にも迅速なヘルプが可能であり、メンバー一人ひとりの臨機応変な行動が目立った。これは、事前の役割分担を超えてゼミナール生全員がイベントの成功という共通目標を共有していた結果であると評価できる。

一方で運営面では課題も残った。午前・午後の交代時における引継ぎの不備によってノベルティの配布ミスが発生した。これは運営マニュアルを文面による共有に頼り、実体験を伴うシミュレーションが不足していたことが原因であると推測する。今後は、準備段階のグループ内でマニュアルを確認し合うこと、文字情報だけでなく実践的なリハーサルを通じた全員の理解度の平準化が必要であると考えられる。

5.おわりに

本プロジェクトを通じて、産学連携における「0から1を生み出す」ことの難しさと、異なる立場である企業と学生を繋ぐ調整役としての責任を学んだ。特に不測の事態に対しても、組織的な対応と柔軟な企画変更によって目標を完遂できたことは、実社会におけるプロジェクトマネジメントの基礎を学ぶ貴重な機会となったと感じている。

まとめ

2025年度は、1年間を通じて産学連携事業に取り組んできた。今年度の産学連携事業で得られた経験を活かして、次年度の産学連携事業や研究活動および卒業論文執筆につなげてほしい。この経験は、自分たちだけにとどめることなく、下の学年のゼミ生たちにも伝え共有をして、ゼミ活動及び研究活動を充実させてほしい。最後に、本年度の産学連携事業に向けた準備や活動を支援していただいた名城大学経済・経営学会に深く感謝申し上げる次第である。